2016年度　　RA

国　　語

注　意

1. 問題は全部で21ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. ＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

物理学的発想の代表的なものが[1]粒子主義と数量主義です。生物多様性の見方に対するそれらの影響はジンダイ[ア]ですので、まず、粒子主義について見ていきましょう。

粒子主義は物理学や化学において、そして生物学においても勝利を収めました。自然科学だけではありません。社会科学・人文科学においても粒子主義が基本になっています。[2]経済学では、個人は合理的なふるまいをするものと見なします。つまり個人には個性など無く、同じ状況なら皆同じように合理的に行動するものだと見なし、そういう個人が市場において互いに何らの制約も受けずに自由にふるまっていると、見えざる神の手によってすべてがうまくいくと考えるわけです。市場を空間、個人を分子に置き換えれば、これは空間を自由に飛び回っている分子のイメージにそっくりでしょう。

[3]社会契約説に基づく社会というものも、全く同じイメージです。社会は自己の幸福を追求している独立した個人からできており、個人のふるまいは自由なのですが、衝突した時にどうするかのルールだけは、自分の意志であらかじめ社会と契約を結んで決めておくとするのが社会契約説です。近代では自我の確立が重要だと強調されますが、これはまさに他とは明確に区別され、外部のものの影響を受けずに独立した粒子的自己の確立を目指していると言えるでしょう。社会とはこのような粒子的個人の集合体とみなされています。ちなみに個人は英語でindividual。in（否定＝a）＋divide（分ける＝tom）ですから、まさに個人はアトム、原子なのです。われわれ現代人は粒子的な私（わたし）観、人間観、社会観、自然観を持っています。だからこそ［A］遺伝子説という粒子主義の権化のような思想がもてはやされるのでしょう。

粒子主義においては、世界の基本は粒子という実体です（実体とは他のものとは独立してそれ自体で存在し、変化しないもののこと）。実生活のレベルでは私という粒子がすべての基本となります。これは分かりやすい考え方ですよね。この私が一番大切ですし、私という個体はまわりからはっきりと区別されるかちっとまとまった体をもった実在物であり、まさに粒子的です。

粒子主義における「粒子的」とは、①不滅、②不変、③明確な境界、という三つの性質が挙げられるでしょう。不変とはみずか

ら変化はしないし、他と相互作用しても自身は決して変わらないことです。明確な境界をもつとは、外部とははっきりと区別され、そのものはきちんとまとまってギョウシュウしているということです。

以上の三点は、そのまま私という個体に当てはまるわけではないのですが、［　I　］当てはめてしまっているのが粒子的私観の現実です。

個体には、性質①の「不滅」は成り立ちません。②の「不変」も厳密に言えばだめです。同じ状態でずっと続くということなら、不老不死でなければなりません。そうはなれないことは皆が知っています。そこで粒子的私観では、なるべく老いや死は見ないように、見えないようにします。理想の私は不老不死であり、老いや死は克服すべきものなのです。性質③の「明確な境界」は個体の性質そのものですから成り立つのは当然という気がしますが、はたしてそうでしょうか。

生物の特徴の一つに開放系ということがあります。個体はエネルギーも物質も外界から取り込み、またこれらを熱や排泄物として外界に放出します。物もエネルギーも絶えず出入りしているのです。ここで食物を取り込む場合を考えてみましょう。リスやハムスターは頬袋の中に餌を入れて運びます。頬袋の中の餌は、［　II　］リスの一部と考えていいでしょう。では、われわれが家で食べようとリンゴを手に持って歩いていたら、リンゴは私の一部でしょうか。もっと言えば、口腔や、胃や腸という消化管は、消化するという役目の他に、食物を一時蓄えておく機能ももち、消化管の内部は外が体の内側に入り込んだものとも見ることができますから、リンゴを食べて胃に収めても、まだそれは私の一部だとは言えず、リンゴを消化吸収してはじめて私の一部になるとも考えられます。とすると、私という個体の境界は外から見える皮膚なのでしょうか。消化管の壁なのでしょうか。同じ疑問は、酸素を取り入れる肺や、尿を排泄する腎臓においても起こります。

こんなふうに細かく見ていくと、個体がしっかりした境界をもつかどうか、いささか怪しくなってくるのですが、〈私〉ということになると、［　III　］怪しさが増します。普通は「個体＝私」と考えてしまうのですが、延長された表現型も私だというのが本書の立場であり、この立場をとると〈私〉の境目はきわめて曖昧模糊としてきます。

ここでご自身のことを考えてみて下さい。まわりの人にあなたはこういう人物だとイメージを与えているのは、体や思考、つ

まり個体としての特徴ばかりではありません。持ち物、家族、付き合いのある人たち、家系、学歴、過去の業績等々、物であれ人間関係であれ、さまざまなものが総合されてあなたのイメージが作り上げられています。そしてじつは自分自身もそのようなイメージをもとに「私とはこんなものだ」と思い込んでいるのではないでしょうか。私というものから地位や業績や愛用の服や家などのすべてを取り除いて素っ裸にしたら、それでも私は私と思えるでしょうか。

環境だってそうです。環境はその中で生活して慣れ親しんでいるものですが、それ以上に〈私〉です。環境が〈私〉をつくります。そして環境は運命共同体です。生物にとって、その生物の住んでいる環境が無くなれば、その生物は生きていけないのです。こういうものこそ〈私〉の大きな一部でしょう。

もちろん、すべてのものが同じ「〈私〉度」をもつわけではありません。子は〈私〉度ほぼ一〇〇パーセントですが、関わりの度合いにより、〈私〉度は変わり、かなり縁の薄いものまで、〈私〉の裾野（すその）は個体を越えて大きく広がっています。〈私〉は身のまわりに延長しており、思うほどには境界がはっきりしてはいないものでしょう。そして、まわりをどう取り込むかによって、〈私〉自身が変わっていきます。そういうものが現実の〈私〉だと思うのですね。でも、こんなふうには普通考えません。それは現代人が粒子的私観に支配されており、確固として外部から区別されるこの個体のみを私だと考え、不変の私が存在すると思い込んでいるからです。

それにまわりも〈私〉だなどとは思わない方が、楽といえば楽なのですね。現実には子にもパートナーにも不満があるでしょう。もっといい家に引っ越したいとも思うでしょう。そういう理想とかけはなれた現実は私ではないとして、私から切り離して考えられるところが、粒子的私観の助かるところです。まわりも〈私〉だなどと言ってしまえば、〈私〉という現実は、ずいぶんとしょぼくれたものになってしまいますもの。[6] 粒子的私観は理想主義なのです。

結局、粒子的な私とは概念としての私だと思うのですね。そもそも粒子とは概念（イデア）です。概念とは理想のものとして頭に描いたものです。となるとどうしても私がなりたいと思うものを私だと思い込みたくなります。そして、そういう理想の私が実現していない現実は、私が悪いわけではなくまわりが悪いのだと、まわりに責任を押しつけてしまいます。まわりのことに対

して無責任になりがちで、生物多様性をはじめとした環境問題に責任をもって取り組む姿勢が生まれにくくなるでしょう。ここが粒子的私観の問題点の一つです。

粒子的な私においては、自分自身は変わらない、つまり一様なものですから、一様性に価値を置き、多様性の価値は低くなってしまいます。もちろん[7]粒子的私も多様性を口にはしますが、そこでは自分に役立つもののメニューの多様さだけが興味の対象となります。ここもきわめて問題なのですね。

仏教では、「私があるのなら、それは私の思い通りになるはずのものだし、また、［Ⅳ］私と共にあるはずだ。でも現実には、自分自身は自分の思い通りにふるまえないし、死んでしまうのだからずっと共にあることもない。だからそもそも私などというものは無く、私とは頭が作りだした妄想なのだ」と説きます。御説ごもっともです。しかし粒子的私観が確立している現代人に対して「私は無い、無我だ」などと言っても、妄言にしか聞こえません。そこで「私は無い」などとにべもないことは言わずに、私はあるのだが、私を概念としてではなく現実に近づけて捉え、苦労して育てている子どもも〈私〉、相互作用子として取り込んでいる相手も〈私〉と、〈私〉の範囲を広く捉えるように提案したいのです。範囲を広げれば、［Ⅴ］〈私〉そのものが多様な要素を含むことになり、多様性に価値を置かざるを得なくなります。粒子的私へのこだわりを捨てれば、「私は無い」とも「環境は私だ」とも、見ることができるようになるのですね。環境が〈私〉だとすれば、多様な生物たちのつくり上げている[8]環境の問題は、まさに〈私〉自身の問題。それは好きだから守る、興味がないから考えないというレベルの話ではなくなってきます。

（本川達雄『生物多様性』による）

問一　傍線部1「粒子主義」とはどのような考え方か。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① 世界は、他からの影響を自分の意志であらかじめ拒絶した粒子的個人の集合体から成り立っている、とする考え。

② 世界は、他との関係や影響を受け容れつつも独自性を保とうとする粒子という存在で成り立っている、とする考え。

③ 世界は、他とさまざまな契約を結ぶことによって独立を保とうとする粒子という存在で成り立っている、とする考え。

④ 世界は、他と明確に区別され、他からの影響を受けることのない独立した存在である粒子で成り立っている、とする考え。

⑤ 世界は、他の存在を自分の役に立つ時だけ取り込むが、それ以外は排除する存在である粒子で成り立っている、とする考え。

問二　傍線部2「経済学では、個人は合理的なふるまいをする」とあるが、ここでいわれている「合理的なふるまい」とはどのようなことか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 2 。

① 神という存在は、人の判断を越えた理屈によって、人の経済活動をコントロールしている、ということ。

② 人々は神の意志を無視して、あくまでも科学的な合理性に従うことで最適なふるまいをする、ということ。

③ 状況が同じなら、個々の人々は市場全体の相互関係において皆同じように最適なふるまいをする、ということ。

④ 経済学は、研究者が他からまったく影響を受けることなく、自由に行うことができる学問である、ということ。

⑤ 市場というものは、空間を自由に飛び回っている分子のように、何らの制約も受けずに成り立っている、ということ。

問三　傍線部3「社会契約説に基づく社会」とあるが、これはどのような「社会」か。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① 独立した個人が、人との関係ではなく、神との契約によって生かされているという社会。
② 自分の意志を常に主張し、他にうち勝つことで自分に有利な契約を結ぶという競争的な社会。
③ 自由なふるまいをする独立した個人同士が衝突した場合に、どうするかがあらかじめ定めてある社会。
④ 個人と個人が細部にいたるまで契約関係によって結ばれ、それによって規範が保たれているという社会。
⑤ 自我の確立の重要性を認識しつつも、他と衝突した時には、かならず他に譲歩するということを前提としている社会。

問四　空欄 A に当てはまる最適な語を次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① 画一的　② 社会的　③ 一時的　④ 運命的　⑤ 利己的

問五　傍線部4「老いや死は克服すべきものなのです」とあるが、どうしてこのように考えなければならないのか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 粒子的私観においては、〈私〉は不変でなければならないため。
② 〈私〉という存在はかけがえのないものであり、永遠の命を望むため。
③ 人は分子から成り立っており、それが破壊されることは宇宙の消滅を意味するため。
④ 個体というものはしっかりした境界をもたないもので、完全にこの世から消滅することはないため。
⑤ 仏教においては〈私〉などというものは存在しないとされており、「老い」や「死」はあり得ないため。

問六　傍線部5「生物の特徴の一つに開放系ということがあります」とあるが、「開放系」とは、ここではどのようなことを言っているのか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 生物はどのような時も他の生物と関わりをもって生きている、ということ。
② 生物は個体のみで存在しているのではなく、外界とのやり取りを常にしている、ということ。
③ 生物の自己認識は自分のみによるものではなく、他からの見方に影響されている、ということ。
④ 生物の消化管というものは常に外界に接しており、いつでも離脱することができる、ということ。
⑤ 生物にとって食べ物というものは自分だけのものではなく、他と共有しているものでもある、ということ。

問七　傍線部6「粒子的私観は理想主義なのです」とあるが、どのような意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 「粒子的私観」とは、〈私〉を実際には存在しないものと信じることにより、仏のような理想的な存在になることを目指す主義である、ということ。
② 「粒子的私観」とは、〈私〉を他からの影響を受けつつも、揺るぎない個体だと認識し、理想的な生き方を追求すべきだと主張する主義である、ということ。
③ 「粒子的私観」とは、〈私〉という存在が神によって作られたものであり、環境などをも取り込む万能のものであると認識しようとする主義である、ということ。
④ 「粒子的私観」とは、他から影響を受けない存在として、都合の悪いものを排除し、自分のためだけに理想的な〈私〉を追究しようとする主義である、ということ。
⑤ 「粒子的私観」とは、〈私〉という存在が不滅、不変なものであるかどうかに関わらず、生物として合理的、理想的に作られていると認識しようとする主義である、ということ。

問八　傍線部7「粒子的私も多様性を口にはします」とあるが、それに対し、筆者の必要だとする「多様性」とはどのようなものか。最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 〈私〉が個性を発揮することで、周辺に生み出されていく現象の多様性。
② 〈私〉という存在を維持するために必要な、個体の外界に存在する要素の多様性。
③ 〈私〉を「無我」として認識した時に、かえって〈私〉が持ち得るであろう多様性。
④ 〈私〉が生きていく楽しみを作り出すものとして、〈私〉の身近にあってほしい事物の多様性。
⑤ 〈私〉の存在が危機に陥った時に、さまざまな角度から助けてくれることを期待できるような多様性。

問九　傍線部8「環境の問題は、まさに〈私〉自身の問題」とあるが、どうしてこのように考えられるのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① 「環境」とは〈私〉という存在に含まれる重要な要素であり、〈私〉の生存に必須のものであるから。
② 「環境」とは〈私〉が生存することで、生み出されたものであり、〈私〉と一体のものであるから。
③ 「環境」とは〈私〉の作りだした妄想であり、それを克服して自我を形成することが望まれることであるから。
④ 「環境」とは〈私〉を外側からしばるものであって、そのようなものは〈私〉にとって忌避すべきものであるから。
⑤ 「環境」とは〈私〉の相互作用子としての相手のことだが、その相手と良好な関係を保つことはむずかしいことであるから。

問十　空欄 Ⅰ ～空欄 Ⅴ に当てはまる言葉の組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① Ⅰ さらに　Ⅱ どうしても　Ⅲ たぶん　Ⅳ なんとなく　Ⅴ ずっと
② Ⅰ どうしても　Ⅱ なんとなく　Ⅲ ずっと　Ⅳ さらに　Ⅴ たぶん
③ Ⅰ たぶん　Ⅱ ずっと　Ⅲ さらに　Ⅳ どうしても　Ⅴ なんとなく
④ Ⅰ ずっと　Ⅱ さらに　Ⅲ どうしても　Ⅳ たぶん　Ⅴ なんとなく
⑤ Ⅰ なんとなく　Ⅱ たぶん　Ⅲ さらに　Ⅳ ずっと　Ⅴ どうしても

問十一　二重傍線部ア「ジンダイ」、イ「ギョウシュウ」を適切な漢字で記せ。**解答用紙(その2)を使用。**

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

詩歌と散文とを問わず、文学作品にとって余情が重要な美的理念であり続けていることは今さら言うまでもない。それでは、余情とは何か。簡単に説明できないから「余情」なのだが、一般的には、物事が終わった後になってもまだ残る情趣や風情と言える。文学作品について言えば、言語表現のすきまから汲みとれる作者の感慨などの言外の意味をさす。と同時に、文章という言語表現によって刺激を受けることで形成されたイメージに対して、読者側が抱く情緒をもさしている。後者の場合、そのイメージを契機として読者が自身の過去の記憶をよびおこすことによって生じ、読者の心にそのあとも長く生き続けて、他の何らかの刺激を受けた際にふたたび動き出す、そういった潜在的な情緒をも含めて考える立場もある。

まずは、文学作品からの実例を眺めてみよう。ここでは、余情に似たものを何となく感じられれば、それで十分だ。

そうして、その秋の雨自らも、遠くへ行く淋しい旅人のように、この村の上を通り過ぎて行くのであった。彼は夜の雨戸をくりながらその白い雨の後姿を見入った。

——佐藤春夫『田園の憂鬱』

此れから先わたしの身にはもうさして面白い事もない代わりにまたさして悲しい事も起こるまい。秋の日のどんよりと曇って風もなく雨にもならず暮れて行くようにわたしの一生は終わって行くのであろうというような事をいわれもなく感じたまでの事である。

——永井荷風『雨瀟瀟』

死んで一片の白骨となって、小包紐でしばられ、未知の郵便配達夫の手で汽車に積まれたり、降ろされたり、空高くクレーンで船に投げ込まれたり海風に吹かれたり、時には箱の中でコツコツ音をたてて鳴ってみたりする光景を思うと、自分ながら何か清涼で微笑ましい詩的な感じが湧いてくるのだ。

——木山捷平『大陸の細道』

余情は、いったいどういう文章に漂うと言えるのだろうか。以前に大学生を相手に実施した調査の結果に私見を交えて述べよう。

まず、文章の品格が必要だという。格調が高ければ余情が生まれるといった一般論はもちろん成り立たない。しかし、夾雑物を切りすて、感情を抑制した［A］な文章が、[1]おもねりやくすぐりを多量にとりこんで、とめどなく流れる［B］な文章に比して、余情ゆたかな作品となりやすい、という傾向があることは否定できない。

情報の理論を基礎として展開する文章よりも、状況展開を盛り込み、感情で織りあげる文章のほうが余情を喚起しやすい、ということは常識でわかる。が、ストーリーを追及する文章には余情を感じにくい、という指摘は注目される。心理面が描かれるときに余情を感じやすいのは当然だが、心理を心理として述べるよりも、その場の情景をとおしてなにげなく伝わってくるような書き方が有効だという指摘もある。

話題という点では、読者にとって身近なことが描かれているほうが、自分の体験をよびこみやすいので、余情をかもしだす土壌が形成される。

小説などの場合で言うと、そういえばそんな経験が自分にもあった、と読者に思わせる文章、幼児体験を喚起する文章は、一般に余情を発生させやすい。

人間を描いた文章よりも、秋、森の夕暮れ、夜の静けさなどを描いた美しい風景画のような文章に余情を感じることが多いというのも、それによって思い出がよみがえるからだろう。

文章からなにかを感じるとき、それが［C］でなく［D］であるほうが余情を意識しやすい、という指摘もあった。得体の知れない奇妙な存在感のある文章が読む者の心の奥深くしみこむのだろう。

読んだことが長く記憶に残る文章、しかも、内容のまとまりが明確でなく、完結性に欠ける場合に余情を感じやすいともいう。[2]余情というものが作品の内と外との茫漠としたつながり、ある種の持続感を基礎としているからだろう。

作品の内と外とが時間的に隣り合うのは、いうまでもなく結末の部分だ。小説でも、余情と密接に結びつくのは、話の筋や全

体の運び、描写の仕方といったものより、一編のフィナーレだという。最後の数行が読者の内面に語りかける文章は特に余情を誘いやすい、ということになる。

余情をかもしだす文章の条件をもう少し具体的に考えてみよう。

第一に、読みやすいほどいいとは言えないが、あまりむずかしすぎないことが必要だ。読解するのがやっとという難解な文章では、余情を味わう余裕がないからだ。

第二に、イメージの透けて見える文章が効果的だ。余情を感じるためには、読みながらその作品世界にひたりこむことが大切であり、それにはまず、概念的に説明した文章よりも、会話や動作を生き生きと描き、情景が感覚的に伝わる文章であることが必要である。しかし、そのイメージが鮮明すぎず、うっすらと霞がかかったようにぼかしていたほうが抒情がにじみやすく、効果が高まる。

第三に、興奮を抑えたヒッチの深みから書き手の心のゆらめきがなにげなく伝わってくるのが効果的だ。作者の心象風景があまりはっきりわかりすぎると、読者は身を乗り出して行かない。「さびしい」とか「悲しい」とかいう生のことばでストレートに述べず、そういう気持ちをそれとなく盛りこんでおくことが大切だろう。

第四に、表現にふくみをもたせることが効果的だ。それには、省略を利かせて表現に空白部を設けることが必要だが、[3]含蓄が多すぎると読者に余情を味わうゆとりがなくなり、逆効果となるので、そのあたりの加減がむずかしい。

（中村明『文体トレーニング』による）

問一　筆者は、文学作品における「余情」とは、どのようなものだと言っているのか。その内容と合っていないものを、次の①～⑤から一つ選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① 言語表現が生み出すイメージによって喚起された読み手の深い感情といったもの。
② 言語表現によって立ち現れるそこに描かれた登場人物の心情や感慨といったもの。
③ 言語では表わされていないが、行間から伝わる作者のしみじみとした思いといったもの。
④ 言語表現が契機となって読み手がイメージを抱き、それによってもたらされる読み手の情緒といったもの。
⑤ 言語表現が呼び起こすイメージが読み手の過去の記憶と結びつき、それによって生じる、心に長く生き続ける深い思いといったもの。

問二　空欄 A と B には、どのような語が入るか。その組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① 「冗漫」と「濃厚」　② 「単純」と「複雑」　③ 「無欲」と「流麗」　④ 「寡黙」と「饒舌」　⑤ 「客観的」と「主観的」

問三　傍線部1「おもねりやくすぐりを多量にとりこんで」とあるが、どのような意味か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 13 。

① ユーモアのある内容をたくさん文章に取り入れること。
② 具体的な内容をこと細かく描写して、たくさん文章に取り入れること。
③ 自身の直感や主観的な思いを率直に描き、たくさん文章に取り入れること。
④ 自分のさまざまな経験や思いを感情豊かに描き、たくさん文章に取り入れること。
⑤ 人の気に入りそうな内容や心地よい気分にさせる内容をたくさん文章に取り入れること。

問四　空欄 C と D には、どのような語が入るか。その組み合わせとして最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 14 。

① 「納得」と「疑問」　② 「喜劇」と「悲劇」　③ 「肯定」と「否定」　④ 「疑惑」と「不安」　⑤ 「事実」と「虚構」

問五　傍線部2「余情というものが作品の内と外との茫漠としたつながり、ある種の持続感を基礎としている」とあるが、どのような意味か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 15 。

① 余情が、作者と読み手の関係性によって生じるものだということ。

② 余情が、作品の内容とその作品以外の諸々の状況が関係して生じることがあるということ。

③ 余情が、完結性に欠ける作品の結末によって読者に余韻を残し、かえって持続感を増すということ。

④ 余情が、作品自体と、受け手である読者の内面とのつながりとその継続を基盤としているということ。

⑤ 余情が、作品を読んだ後に、長くその内容の記憶が残るかどうかという持続感に強く影響を受けるということ。

問六　波線部「ヒッチ」の「チ」を漢字にしたとき、同じ漢字の「チ」を含むものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 16 。

① 臨時の窓口をセッチする。

② 仮説と実験結果がガッチする。

③ セイチな彩色が施された壁画。

④ 商品のカチを高める工夫をする。

⑤ あん馬の競技でチャクチに失敗した。

問七　傍線部3「含蓄が多すぎると読者に余情を味わうゆとりがなくなり、逆効果となる」とあるが、なぜそうなるのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 17 。

① 過剰な言語表現は、余情の生じる余地をなくしてしまうから。
② 難解な語句が多すぎると、その部分の意味を考えるのにとらわれてしまうから。
③ 表現に技巧を凝らしすぎると、その技巧に惑わされて、余情を味わうことができなくなるから。
④ 文面に表れない深い意味が多すぎると、読者はその意味を考えることに気を取られてしまうから。
⑤ ふくみをもたせると、いろいろな解釈が可能となり、作者の言いたいことが正確に伝わらなくなるから。

問八　本文の内容と合っていないものを、次の①～⑤から一つ選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

① 感情を直接的に表現するのは、余情の生成にとって効果的ではない。
② 余情を生成するためには、文章からクリアなイメージが描ける必要がある。
③ 読者にとって、馴染みのあることが描かれていると、それが余情の生まれる素地となる。
④ 直接的な心理描写よりも、その場の情景描写を通して心理を描くほうが効果的との指摘もある。
⑤ 状況の描写や感情の細やかな描写で綴る文章のほうが、何かを伝えることを中心とする文書より余情を生じやすい。

三　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

今日ギリシアを脳裏に浮かべる人は、誰しも紺碧の空の下に広がるエーゲ海を思わずにはいられまい。すでに古代においてギリシアとはバルカン半島の先端に位置するギリシア本土と小アジアの一部のほか、クレタ島をはじめとする、エーゲ海に散らばる大小さまざまな島嶼部を含む世界を指していたのであった。[1]いうなればギリシアとは、陸地のみならずエーゲ海、後には地中海をも含む世界を意味していたのだと、言ってもよい。古代ギリシア人にとって、海はかれらの生きる世界を形成する不可欠かつきわめて重要な部分を形成するものであると同時に、ギリシア文明の発達とその拡大にとっても、決定的と言ってよいほど大きな役割を果たしたのであった。実際、エーゲ海、地中海抜きのギリシア文明といったものは考えられない。海はギリシア文明そのものに深くかかわっており、多くの人々がギリシア人といえば海洋民族というイメージを抱いていたとしても、不思議ではない。

本来はオリエントの女神で、海とは関係のなかったはずの愛と美の女神アプロディテが、ギリシアで変貌し、ヘシオドスによって海から生まれたと伝えられていることは、ギリシア人と海とのかかわりを思わせ、[2]海に生きる民としてのイメージを形成する役割を果たしているといえるであろう。また『イリアス』の主人公で、トロイア戦争最大の英雄アキレウスが、海の女神テティスを母として生まれたことも無視できない。

ギリシア人が海というものにどれほど深い愛着の念をいだき、自分たちと海との強いつながりを感じていたかということを物語る名高いエピソードとして、しばしば挙げられるのが、クセノポンの『アナバシス』である。ペルシアのキュロス王子の反乱軍に加勢し、小アジアに遠征したクセノポン率いるギリシア人傭兵部隊が、キュロスの敗死後に退却を重ねた末、ようやく黒海の見える山に到達した折に、海を眼にした兵士たちが、「海だ！　海だ！　（thalatta, thalatta）」と歓声を上げ、狂気乱舞したと、クセノポン自身が物語っている。ギリシア人たちは、海に［　A　］を見たのであった。

海とのかかわりについて言えば、ギリシア人はまた日本人に劣らず魚好きな「魚食い」（ichthyophagos）の民族であって、今日

われわれがヨーロッパ人に対していだく「肉食民族」というイメージと異なり、かれらは肉よりも魚を好んで食べ、ことにもタコは大好物であって、金に糸目をつけずに高価なタコを食べ過ぎて、破産した男の話が伝わっているほどである。

しかし興味深いことに、さほどにまで海と深いかかわりと愛着をもち、海に養われたといってもよいほどのギリシア文明を築いたギリシア人は、元来は海を知らず、海とは無縁の民であった。クレタ島を本拠にエーゲ文明(ミノア文明)を築いた民は、航海術に長けていて、ギリシア人よりもすでに何世紀も前からさまざまな航路を開拓し、エーゲ海は無論のこと、西地中海まで航行し、さらにはエジプトへの航路まで切り開いていた。また、二〇〇〇年前にエーゲ海地中海を自由に航行して、海上貿易によって繁栄しながら、やがて歴史の上から姿を消してしまった謎の民フェニキア人が、まぎれもない海洋民族であったのに対して、ギリシア人は元来海も船も知らず、ギリシアの地に侵入してからかなりの歳月を経た後に、必要に迫られてようやく海を「発見」し、おずおずと海上に乗り出して行ったのであった。その地の先住民族とは異なり、ギリシア人は元来は海洋民族ではなく、その成長の過程でエーゲ海や地中海を征服し、航路を開拓して[3]次第に海洋民族となっていったのである。

ギリシア人による[4]そのような海の発見と征服の過程を反映しているのが、『オデュッセイア』にほかならない。トロイア戦争を主題とした『イリアス』が、陸上を舞台とする叙事詩であるのに対して、その後日譚であり、英雄オデュッセウスの一〇年に及ぶ海上放浪とさまざまな冒険を物語ったこの叙事詩は、ほとんどの場面が海上で展開する海洋冒険譚であって、これを「海の叙事詩」と呼ぶことができるであろう。

ギリシア人が元来は海を知らない陸の民であったことを物語るショウサのひとつは、「海」を意味する最も一般的なギリシア語である thalatta, thalassa という単語が本来のギリシア語ではなく、非印欧語系の先住民族からの [B] 語だということにある(「海をあらわすギリシア語としては、ほかに pelagos, pontos, hals, hydor といった語があるが、ラテン語の mare に相当する、海をあらわす一般的な語は thalatta である)。ギリシア人の先祖たちは海を知らない地に居住していて、アナトリア高原あたりから、バルカン半島の、後にギリシアと呼ばれる地に侵入してから初めて海を知ったものと考えられている。かれらは海の民であった先住民から、海を意味する thalatta という語を [B] したものであろう。

ギリシア人が本来は海を知らない陸の民であり、海よりはむしろ大地を重視する民族であったことは、前七世紀初頭の詩人ヘシオドスの叙事詩『神統記』からもうかがうことができる。神々の誕生とその系譜を物語ったこの作品の冒頭部では、天空や海に先立ってまずガイア(大地)が生じたとされており、そのガイアがポントス(海)を生んだと物語られているのである。ガイアすなわち大地は最も根源的な神格としての位置づけがなされている。これに対してポントスは二次的な存在にすぎない。

さらにはまた、ギリシア神話では海神とされるポセイドン(ラテン名ネプトゥヌス)にしても、その名称自体が、「大地の夫」posis + da を意味するものであって、「大地を有するもの」gaieochos、「大地を揺する者」enosichthonos というエピテトン(称呼)を冠せられているところからして、元来は海神ではなく、大地を支配する神であったと推測されているのである。これらはいずれも、われわれが普通ギリシア人についていだいている海の民、海洋民族というイメージとは異なり、その起源においてはギリシア人がむしろ陸の民であったことを示しているといえよう。つまりギリシア人は元来はミノア文明の担い手であった民やフェニキア人のような、海洋民族ではなかったのだが、ギリシアの地に侵入してから初めて海を知り、そこで先住民族に学んで、やがてかれら自身がエーゲ海から地中海にまで進出して、海の民としての性格を徐々に獲得していったわけである。

(沓掛良彦『人間(ひと)とは何ぞ―酔翁東西古典詩話―』による)

問一　傍線部1「いうなればギリシアとは、陸地のみならず……世界を意味していたのだと、言ってもよい」とあるが、なぜか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

① 古代では、ギリシア本土に近い海も含めて「ギリシア」と称していたから。

② 古代ギリシア人は、エーゲ海、後に地中海を世界の果てと考えていたから。

③ 古代ギリシア人は、エーゲ海や地中海を生活の基盤として文明を築いたから。

④ 古代ギリシア人は、もっぱら海上で生活し、独特な海洋文明を創り上げたから。

⑤ 古代ギリシアは地中海の外側を、自分たちと対立するアジア世界と考えていたから。

問二　傍線部2「海に生きる民としてのイメージを形成する役割を果たしているといえるであろう」とあるが、なぜそういえるのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① ヘシオドスが作為的に愛と美の海の女神を創造したことによって、ギリシア人たちは自分たちを海の民族と考え、結束することになったから。

② 愛と美の女神が海から誕生したとするギリシアの伝説は、ギリシア人が海を根源的なものと考えている民族というイメージを与えるから。

③ ギリシア人は最初から海の女神の信仰を持っており、愛と美の女神が海から生まれるという神話が作られたのも、ごく自然なことだから。

④ オリエントの大地の神を海の女神に変貌させることで、「海の民ギリシア人」のイメージをオリエントの人々に植え付けることに成功したから。

⑤ オリエントの女神信仰に対抗して、全く新しい愛と美の海の女神を創造したことは、ギリシア人が海を愛する民族であることを思わせるから。

問三　空欄 A に当てはまる最適な語を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 21 。

① 冥界　② 魔力　③ 天界　④ 異郷　⑤ 故郷

問四　傍線部3「次第に海洋民族となっていったのである」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 22 。

① 本拠地を逐われたギリシア人が、放浪の果てに、海に活躍の場を発見するにいたった、ということ。
② 本来陸の民族であったギリシア人が必要に迫られ、海で生きる技術を身に付けていった、ということ。
③ 元来海と無縁のギリシア人が、海洋民族との長期間の戦争によって、海軍力を強めていった、ということ。
④ 元から海洋民族であったギリシア人が、数多くの神話を創り出して、その自覚を高めていった、ということ。
⑤ 弱小であったギリシア人がフェニキア人を支配下に置くことで、海の覇者になっていった、ということ。

問五　傍線部4「そのような海の発見と征服の過程を反映している」とあるが、『オデュッセイア』はどのような点でそれを反映しているのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 23 。

① 陸上での戦争の後の、ギリシア人の、長期にわたる海での苦難と冒険を物語っている点。
② トロイア戦争後に、ギリシア人が海を初めて見た驚きを、抒情的に歌い上げている点。
③ エーゲ海、地中海におけるギリシアの征服戦争の歴史を正確に記述している点。
④ ギリシア人の小アジア遠征の時の、海上での戦いを生き生きと物語っている点。
⑤ トロイア戦争後に、ギリシア人が航海術を身に付けてゆく過程を具体的に物語っている点。

問六　空欄 B に当てはまる最適な語を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 24 。

① 信用　② 悪用　③ 交用　④ 借用　⑤ 軍用

問七　傍線部5「大地を重視する民族」のここでの意味の説明として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 25 。

① 力を尽くして大地を開拓する民族
② 勤勉で誠実な農耕民族
③ 大地の豊かな実りを神に捧げる民族
④ 天空への憧れよりも、現実を大切にする民族
⑤ 大地を最も根源的なものと考える民族

問八　この文章の内容と合っていないものを、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 26 。

① 古代ギリシア人は海に深い愛着の念をいだいていた。
② 古代ギリシア人は、肉よりも魚を好んだ。
③ ギリシア人は、他所からギリシアの地に侵入した。
④ ギリシア神話に登場するポセイドンは、本来海神である。
⑤ 「海」を意味する単語は、ギリシア語に元からあったものではない。

問九　二重傍線部「ショウサ」を適切な漢字で記せ。**解答用紙(その2)を使用。**